

## 発刊によせて

本書発刊のきっかけは、国立大学法人東京大学工学部社会基盤学科において、二〇〇五年度に新しく開講されたマネジメント関連講義のひとつである「公共経営学」にある。本講義を開講するに当たって、当時独立行政法人水資源機構理事の福田昌史氏に非常勤講師として、本講義を担当していただくことをお願いすることにしたのである。本書は、その講義録をベースに福田氏が執筆された連載記事「建設技術者の本懐」（社団法人全日本建設技術協会発行「月刊建設」）を再編集し、発刊にいたっている。

東京大学社会基盤学科の学生たちのなかには、以前に比べてその割合は減っているものの将来の職として、国或いは地方公共団体における技術官僚を目指すものが少なからずいる。彼らは、その途を選択すると国や地域の将来の発展や人々の暮らしを豊かにするために、技術者としてインフラの建設事業に関わるだけでなく、公共サービスの提供者として政策を立案したり、必要な制度設計に関わったりすることになる。いわゆる公共経営の一翼を担うことになるのである。組織の中で与えられた立場において、技術官僚として何をどのように判断し、実践していくのが良いか、そのためには何を資質とし

て備えておく必要があるかを考える講義、すなわち「実学としての公共経営学」を彼らに提供したいと考えたのである。

福田氏は、ご自身の言を借りると、国土交通省（旧建設省）の技術官僚としては、異色のキャリアを経てきた人物である。同省にとつて、この一〇〜二〇年は、激動の時代であったと思われるが、この変革の時代が同氏の優れた資質を求め、同省の中で四国地方整備局長までのキャリアを造りあげたように私には思える。幸運にも、同氏が國島正彦先生（東京大学教授）のもとで博士の学位を取得されたことをきっかけに、お付き合いをさせていただき、その経験に裏打ちされた判断力、組織を動かす実行力、さらに人格に惚れ込んでいた。そこで、この講義の開講に当たつて、福田氏に講義を是非お願いしたいと考えたのである。

講義を引き受けていただくに当たつてお願いしたことは、以下のことである。

(一) 技術官僚としての「いきさま」を伝えて欲しい。同氏は、常日頃、ご自身の技術官僚としての職を、一生を懸けるに足る仕事として、この途を選択して良かったと述べられていた。是非、その面白さを伝えて欲しいと考えたのである。そして講義の内容も、ご自身の経験に基づくものとしていただいた。

(二) それぞれの立場で悩んだこと、考えたことを話して欲しい。マネジメントする

ことは、意思決定、判断することである。現場で判断する際に、どのような視点で事象を捉え、どのように結論を導き出すかは、教科書には書かれていない。実際の経験に基づく意思決定のプロセスを伝えて欲しいと考えたのである。

(三) 各講義の中で自身が失敗したことを話して欲しい。マネージャーとして意思決定した際には、その責任を自身で負わなければならないが、その成長過程では、経験が必要である。特に、失敗の経験から学ぶことは大きい。しかし、現在の職場環境では、失敗が許されない雰囲気があり、特に公務員の社会では、自身のキャリアの汚点にもなりかねない。そこで、良いと思えることには果敢にチャレンジする精神を持つこと、他人の失敗からも学ぶ方法論を身に着けることが重要と考え、このお願いをしたのである。学生たちの前で、実際に自身の失敗談を話せる官僚は、なかなかいないのではないだろうか。

そして、最後に、講義で話していただいた内容を、本として是非出版したいと考えていたのである。

さらに、同氏のキャリアに基づき、七回の講義を以下のとおり設計し、ご了解いただいた。

第一回 技術官僚のキャリアと公共経営（全体概要）

第二回 事業経営者としての役割（工事事務所長時代）

第三回 公共調達制度設計者としての役割（積算技術研究官時代）

第四回 公共サービス提供者としての役割（本省治水課長時代）

第五・六回 地域の経営者としての役割（地方整備局長時代）

第七回 組織の改革者としての役割（水資源機構理事時代）

二〇〇五年度より提供していただいているこの講義は、毎年、教室に学生が入りきらないほどの人気講義となっている。福田氏の経験に基づく迫力溢れる講義は、技術官僚としてだけでなく、土木技術者として、或いは職業人として生きる際の多くの糧を伝えていただいている。おそらく、講義に出席している学生たちよりも、三年間ほぼ毎回同席させていただいている私自身が一番学ばせていただいているように思う。心から御礼申し上げる。

最後に、福田昌史氏の今後益々のご健勝をお祈り申し上げるとともに、将来、技術官僚の途、土木技術者を自身の職として志している若い方や土木技術者の育成の在り方について考えておられるベテランの方にも、是非本書を読んでいただきたいと思ふ次第である。

平成二〇年三月吉日

東京大学 小澤一雅